

名古屋大学全学共通科目「キャリア形成論」の実践と 学生の評価に関する考察

牧野 正人

名古屋大学「キャリア形成論(以下「本講座」という)」が開講されて約5年¹⁾が過ぎようとしている。本講座は、名古屋大学全学同窓会の寄附講座として運営されており、何度か更新を繰り返しているが、来年度からは新たな体制²⁾により引き続き全学同窓会の寄附講座として運営されることが決定した。本稿では、これまでの本講座の実践と、この講義を通じて与えることのできた学生たちの変化について纏めておきたい。

1. 「キャリア形成論」の概要

(1) 開講の狙い

この講座は、産業界、法曹界、職業会計人、行政サービスなど様々な分野で活躍されている本学先輩方のキャリア体験をもとに、きわめて変化が激しい情勢の中にある社会の動向や、またその職場で働くための心構え、知識、方法などをわかりやすく提示してもらい、学生が自らの進路を考える際の参考とすることを狙いとしている。

名古屋大学は、13大学院に大学院生約6,000名のほか、9つの学部で9,700名の大学生を擁する総合大学であり、所属する学生が学ぶ分野や、個人の志向の広がりも極めて大きい。そのため、この講座に出講をお願いする講師には、学生に対して講義いただく内容について、業界・企業等、あるいは就業環境の情報紹介もさることながら、講師が個人として主体的にかかわってこられた「仕事」そのものを軸にさせていただきようお願いしている。学生はそれらの中から、

- ・ 目標実現のための熱意
- ・ 周到的な事前の準備や努力
- ・ その結果としての成功あるいは失敗
- ・ 更には偶然がもたらす契機

などが、どのようにして講師のキャリア形成に作用したのかを学んでいる。

また、同窓という共通体験をベースにした世界の中で紹介されるエピソードの数々は、一つひとつが学生たちにとって親近感を持って受け入れられており、本

講座が、全学同窓会からの寄附講座であることのもたらす最も大きな効果とあってよい。

講義責任者としては、講義を進める上で、特に誘導的な構成とならないように留意した。あくまで先輩講師の講義内容を自らのあり方、将来を考える起爆剤とするようにして積極的に受け入れて質問し、対話を通じて自らのキャリア形成にプラスとなる点を自主的に学ぶことを期待しているためである。

(2) 講義の設定及び運営

講義全体の内容は下記の通りである。

(ア) 講義の位置づけ

本講座の開講部門は全学の基礎教育を統括する教養教育院であり、「全学教養科目」の一部として位置づけている。また、全学部2年生以上を対象とした全学開放講座(2単位)としているが、3・4年生も受講している。

(イ) 構成

講座は、前期・後期にそれぞれ15回/期として開講しており、一学期15講義のうち、最初と最後を講義責任者が担当し、「オリエンテーション」と「まとめ」を行っている。残りの13講義については、先輩講師が自らの体験をもとに学生時代の振り返り、自らの夢、社会の現実などについての講義をするという構成にしている。全学同窓会の寄附講座ということから、講師は、全員本学のOB、OGをお願いしているが、各講師の講義には、なんとか自分たちの経験や思いを後輩に伝えたいという気持ちが強く感じられ、学生も好意的に受入れている。

(ウ) 時間配分

講義は、全90分のうち、約75分程度を講師の「講義」に充て、残りの時間は質問を含む講師との対話時間に充てている。授業終了後に、講師に対して個別質問をするため教室に残る学生はいるが、授業中における対話時間帯の充実度については、現状ではまだ満足できる状態にはない。学期の初め頃には学

生から挙手による質問等が出るものの、残念ながら徐々に少なくなってくるのが実態である。そのため、学期の中盤頃から出席表の裏に質問事項等を書かせて、対話時間帯に講師から回答してもらう方法を併用、或いは講義責任者が補足事項を加えるなどして対応している。大まかな印象としては、講義内容が「専門」的になり過ぎたり、あるいは「一般的な正論」のみの展開が続くと学生の関心も薄れ、質問が低調になるようである。

すべての結果は、いろいろなことの積み重ねの延長線上にあり、講師には学生時代の進路決定に関する経緯、仕事に就いてからの成功談、失敗談など個人的・具体的話題も適宜織り込みながら「仕事の世界」に話を繋いで頂くようお願いしている。

出講頂く一部の講師からは、他大学での講義体験と比較して本学学生の「おとなしさ」についてご意見を頂くこともあるが、講義運営について更に一層の工夫が求められる部分である。

(工) 単位認定および成績評価

単位認定および成績評価は、出席数と課題レポートの総合評価で行っている。もともと本講座は、学生がキャリア形成をするきっかけとして、講師の体験に根ざす話を聴くということを中心に位置づけているため、単位認定要件としての出席管理を厳格に行っている。病欠、クラブ活動などによる公欠扱いを求める学生もあったが、本講座における出席管理上はすべて欠席としている。やむをえない事情による数回の欠席は、他の単位取得条件への真剣な取り組みにより、合否認定にあたっては十分リカバーされうるものであり、人生においても起こりうる一瞬のビハインドを自分自身のがんばりで取り返すという姿勢も身につけてほしいからである。

出席管理以外の単位認定条件としては、読書感想文などのレポート作成を課している。講義責任者を含む14名の講師が、それぞれの講義時に推薦図書指定するが、学生には15回の講義を3期に分け、その期間中に指定された課題図書の中から1冊、通期で3冊について感想文を提出させている。またすべての講義が終了した時点で、心に残った1名の講師を選び感想文を書かせ、合計で4本のレポート提出を課している。「レポートの分量は1,500字程度、ワープロにて作成すること」と条件を付け、提出期限の厳守化とも併せて、一定のルールへの対応に慣らせる配慮も行っている。

(才) 課題(1)・・・「読書感想文」

出席と並んで単位評価項目の一つとして重視している課題図書について述べる。

2008年度と2009年度中に課題図書として指定された56冊のうち、受講した学生たちが選択した上位10位までの図書名は下記の通りであった。

	著者名	書籍名
1	長山靖生	『不勉強が身にしみる』
2	内田 樹	『下流志向—学ばない子どもたち、働かない若者たち』
3	山田ズーニー	『おとなの進路教室』
4	山田ズーニー	『あなたの話はなぜ通じない』
5	横山秀夫	『クライマーズハイ』
6	ジャック・ウェルチ	『ウィニング 勝利の経営』
7	小沢征爾・広中平祐	『やわらかな心をもつ』
8	サミュエル・スマイルズ	『自助論』
9	中村修二	『怒りのブレークスルー』
10	幸田真音	『コイントス』

講師から推薦される図書はサイズ別に、文庫本から新書、ハードカバーまでに及んだ。ページ数も100ページ程度から、500ページ弱までの広がりがあり、ジャンルとしてはキャリアやコミュニケーションについて述べたもの、経済・経営に関するものまで様々な分野のものが並んでいる。

本を読まなくなったといわれている学生たちに、とにかく手に取って読ませ、キャリアについて考えるきっかけを与えたいとの思いから、講師が工夫をこらして選択・提示した結果と受け止めている。

学生たちが選んだ書籍の傾向としては、購入価格の影響からか、ハードカバー本よりも、小型本を選ぶ傾向が強かった。ページ数については、上記10冊の平均ページ数は、約300ページとなっていることから、学生は、必ずしも安易にボリュームが少ないものを選んだということもなさそうである。またジャンルについても特定分野に集中する傾向もなく全般的な広がりを持っており、自らの問題意識をベースに選択した様子がうかがえる。

感想レポートとして提出された学生の意見も「学校の授業レポートを書くための読書に、ここまで考えを改めさせられるとは思っていなかった。この授業を採って本当に良かった(情報文化学部)」、「成人式を迎えたこの時期にこのような本に出会えたことは、自分にとってとても大きいことだと思う(工学部)」、「この本を読み始めたときは、これほど感銘を受けるとは思いませんでした(農学部)」などがあつた。

学生が気づいていないことに対して視野を広めさせる効果はもちろんのこと、学生自身が日頃気になっていることなどを改めて整理させる機会として「本を読ませる」ということ、更にそれを一定のボリュームに「わかりやすくまとめさせる」という課題は適当であり、学生たちも感想文に、自らの体験と重ねあわせた気づき、新たな決意などをまとめていた。一人ひとりにとってキャリアを考える上での一里塚にはなったのではないかと思っている。

(カ) 課題 (2) ・ ・ ・ 「講師に対する感想文」

推薦図書その他、授業を通じて心に残った講師について感想文を書かせた。この課題は、ややもすると一過性で終わってしまいがちなオムニバス方式の講義を、改めて学生に講義全体を振り返らせ、「講義要項」あるいは講義のプリント等を再確認させることを通じて、自分のキャリアについてもう一度想起させることを狙いとしている。

学生は、感想文の対象として特に偏りなく講師を選択した。また同一人を選択してもその選択理由もまちまちであるなど自由な観点から課題に取り組んだ。選んだ講師の生き方に対し、それぞれの視点から肯定的なコメントを記す学生が大部分であったが、中には激しく反発する学生もいた。結果として講師の生き方と自分自身の現状に関し、それぞれに何かを感じ取ってくれたものと理解している。

(キ) 課題対応を通じた学生の社会性指導

A4 × 1 枚にワープロ 1,500 字程度で、締め切り日までに提出、という事前の条件提示に対し、当初は手書きで提出するもの、字数を守れない、タイトル・氏名などの記載がない、論述の体裁をなさない、締め切り後に提出するものなどが散見された。レポートは学期中 3 回に分けて提出することになるため、提出の都度注意を与え、何事においても事前に提示された条件がある場合には、よく内容を確認することの必要性、および自分がタッチしたものを世の中に送り出すにあたっては、「プロダクト・アウト」ではなく、「マーケット・イン」に立脚した行動の重要性についても指導した。

(ク) 講座の周知

本講座では、2 年生以上の学生を対象に開講しているが、講座の存在感・認知度を高めるために、全学生に対して大学から年度始めに配布される「授業要覧」、「履修の手引き」とは別に、講義内容や OB 講師のプロフィールなどをまとめた「講義要項」を作成し、各学部の協力を得て、学部のロビーや事務室近くなど、授業登録前に学生が集まり易い場所への積み置き配布を行っている。

受講希望者については上述の効果もあってか、前期においては定員 200 名を超えるエントリーがあったが、最終的には、定員内で納まっている。後期については例年前期の 30 ～ 40% の登録にとどまっていたが、2008 年度後期においてやっと 50% 程度まで到達した。

(ケ) その他

講義予定日に所用があり、欠席を余儀なくされた学生のうち、希望者に対しては、記録用に録画している DVD の貸し出しを行っている。2008 年度の前期授業開講時には 3 名が、後期については 5 名がこの制度を利用した。

なお、提出された「読書感想文」、「講師に対する感想文」のレポートはそれぞれコピーを取り、講義時の「DVD」、「写真」、「当日の質問」を整理したものと併せて、該当する講師にお渡ししている。各講師からの反応はいずれも好評で、授業における後輩の真摯な受け止めに非常に喜んでくれているほか、DVD・質問表については、「学生の反応等がよくわかり、特に次回講義時に向けた反省点の整理に非常に有効でありたい」とのコメントを得ている。

2. 講師のプロフィール

本講座の目的は、キャリア形成の実態を多くの先輩の実例から多面的に学び、併せて推薦図書を読むことを通じ、いろいろなことの中に価値を見出して、自らのキャリアを考えさせ、ひいては反映させることにある。従って、講師の選任に当たっては、現在のポジションや実績以外に、活動の分野においてもできるだけ広がりをもたせること、また年代的にもある程度キャリアの振り返りが可能な年代と、キャリア形成進行中である現役年代のバランスをとるよう心がけた。

(1) 講師の出身分野別構成

2006 年度から 2008 年度の 3 年間に開講した 78 講義の出講者に関する出身分野別構成比率は、下記の通りであった。また、年齢別では 60 歳以上が 54%、60 歳未満が 46% とほぼ半々の状況にある。女性講師の比率は約 10% となっているが、受講生のうち、女子学生の占める割合が約 30% を占めること、更に女性の活躍する分野の広がりと共に、社会的地位も従来に比べて大きく改善されており、参考になるキャリアも増えているので、さらに比率を増していく必要がある。

分野	比率	分野	比率
製造業	29.5%	金融	6.4%
独立系 (弁護士、写真家ほか)	23.1%	流通	5.1%
行政	11.5%	教育	3.8%
報道	10.3%	広告	3.8%
公益法人	6.4%	—	—

(2) 講師の出身学部

同時期における講師の出身学部構成比率は、下記の通りである。

出身学部	比率	出身学部	比率
経済学部	26.9%	農学部	10.3%
文学部	20.5%	理学部	6.4%
法学部	19.2%	教育学部	5.1%
工学部	11.5%	—	—

文理およそ7：3の比率である。受講生の比率が概ね半々（理系が若干多い）となっていることや、受講生からの希望もあり、理系出身者をもう少し増やす必要があると考えているが、各学部の受講率の観点等も含め今後の検討課題としておきたい。

3. 受講定員及び登録者数

(1) 受講定員

前期、後期各200名を受講定員としている。教室は、270名が収容可能であり、プロジェクター、書画カメラ、DVD等のAV装置、パワーポイント等投影用スクリーン×2面、大画面モニター×3面が準備されている。

(2) 受講登録者

受講者数については、前期と後期では差がある。すなわち、前期は、ほぼ200名を充足するが、後期については、約半分の充足率となっている。

前期と後期の受講登録者数に差がある理由については、諸説がある。「後期になると理系の実験等が増え、学生の時間的余裕が減るために受講が減るのではないか」、あるいは「新学期としての春の位置づけと、継続期としての秋の位置づけのもたらす『やる気』の影響の差ではないか」、更には「受講科目登録手続きのIT化が進み、学生は、自宅のパソコンなどから受講登録を済ませることが可能になったため、受講登録前に、学部事務室などへ積み置いた『後期講義用の講義要項』を見るチャンスがない」などいろいろな可能性が論じられているが決定的なものはない。各要素の複合・相乗効果と見られる。

(3) 受講登録者数の変遷

受講生の絶対数は、通年ベースで、2005年度161名、2006年度298名、2007年度265名、2008年度295名、4年間の通算で1,019名となっている。

年・期 人	2005	2005	2006	2006	2007	2007	2008	2008
	前	後	前	後	前	後	前	後
期計	75	86	197	101	198	67	193	102
年度計	161		298		265		295	

試行的に講義を開始した2004年度の翌年、2005年度が本格的な運営となるが、その後3年を経た2008年度において、受講登録理由の一つに「講義の評判がよい」を選択する学生も67.8%（2008年度後期／授業開始時調査）あり、「キャリア形成論」の認知度が、少しずつ高まってきた印象もある。

(4) 受講登録者の学部・学科別状況

学部・学科別の登録者を2007年度と2008年度2年間の平均で見ると、各学部在籍者のうち、受講登録者数は受講可能学年となる2年生ベースで、次の通りである。全学の学部2年生2,289名のうち、約260名(11.3%)が受講したことになる。

学部	登録者	学部	登録者
①工学部	91.5名	⑥情報文化学部	13.0名
②法学部	45.0名	⑦医学部(注)	12.5名
③経済学部	35.5名	⑧教育学部	12.0名
④農学部	24.5名	⑨理学部	9.0名
⑤文学部	16.5名	<合計>	<259.5名>

(注：医学部医学科12名、保健学科0.5名)

これを、各学部の2年次在籍者との比率から見ると、次の通りである。

学部	登録者	学部	登録者
①法学部	28.7%	⑥文学部	11.5%
②経済学部	16.6%	⑦工学部	10.9%
③情報文化学部	16.4%	⑧医学部(注)	4.0%
④教育学部	16.0%	⑨理学部	3.2%
⑤農学部	13.4%	<全体>	<11.3%>

(注：医学部医学科11.6%、保健学科0.2%)

絶対人数では91.5名と一番多い工学部も、2007年度から2008年度における2年生の平均在籍者が843名であることを考えると、学部別出席率では、10.9%となり、法学部の28.7%を筆頭に文系学部のキャリアに対する関心が高い傾向にあること、また大学院への進学指向の高い学部は、とりあえずは先のこととしているのか、相対的に関心が低いことがわかる。講師の選定にあたり、受講登録者絶対数を基準とするか、各学部からの出席率に重きを置くか、講師の文理別構成に悩む所以である⁽³⁾。

(5) 受講登録者及び受講率

2007年度から2008年度、2年間4回の学生の受講登録者数および、受講率、平均出席者数は次の通りであった。

	受講登録者	出席率	平均出席者
2007前期	198名	64.9%	128.5名
2007後期	67名	74.5%	49.9名
2007年度計	265名	67.1%	178.8名
2008前期	193名	83.5%	161.2名
2008後期	102名	54.4%	55.5名
2008年度計	295名	73.4%	216.7名

2007年度、2008年度を年度平均で見れば、受講登録者数、出席率、平均出席者数とも増加傾向にあるが、期毎の出席率にはばらつきがあり、2年間の実績値のみでは一般的な傾向ははかれない。

(6) 開講目的との関係

この講座は、元々、学生の就職後の離職率にいう、いわゆる「7・5・3」現象⁽⁴⁾を受けて、社会に出る大学生一般に対して、就業観を持たせる契機のひとつとしたいとの考えからスタートしている。しかしながら、理科系の学生に比べて、大学時代に学んだことが即効的に社会で機能しづらい文系学生に対しては、ハンディキャップ克服の点からも、より大きな参加・聴講期待があったことは事実であった。その意味からは、受講率の高い学部が文科系主体であったということは、それなりの成果があったとみても良いと思われる。

一方、講義責任者としては、工学部、農学部、医学部の学生の受講率が、予想していたより多かったことに、改めて驚いている。文科系の学生に比べ、専攻と進路の結びつきが比較的強そうな理科系の学生が、文科系に劣らない登録者数を示すことは、単に大学における専攻と、受け皿となる社会との関係の強弱に留まらない別の要素の存在を伺わせる。

「やりたいことが見当たらない(農学部)」、「卒業後の進みたい進路が定まらない(工学部)」、「自分の専門は何なのか。大学院に進むかどうか(農学部)」、「自分は本当にここにいていいのか?とたまに思う(工学部)」、「院へ行った場合、その分野で本当に自分の一生の仕事としていけるのか、文系の職業を選択した場合、今までの学業は無駄になるのではないか、またその職業でやっていけるのか(工学部)」、「・・・高校、大学進学と何も考えず、周囲の人々の意見に則りここまで来てしまい、自ら重大な決定をなしたことはないまま成人をむかえようとしています・・・(医学部)」など、アンケートに示されるキャリア設計について悩む学生の声は聞き置けない。学生たちの声については、別項目⁽⁵⁾で紹介する。

4. 受講生のプロフィール

受講生のプロフィールについて、アンケート調査により得られた結果を示す⁽⁶⁾。

(1) 卒業後の進路予定

2年生から4年生までの学生のアンケート結果のうち、2008年度後期受講生のものを見ると次の通りであった。まず、後期/開講時(2008年10月)と、後期/終了時(2009年2月)の状況を示す。

<別表IV-(1)-2 現時点における「卒業後進路」希望(2008年度後期/開講時)>

例	卒業後進路 (2008年度後期/開講時)	人数	比率	例/分野・職種
1	就職	32	48.5%	医師、商社、電気系技術研究職、公務員、旅行関係、マスコミ、法律実務、製造業等
2	進学 同一分野	23	34.8%	
3	決めていない	11	16.7%	
4	進学 異分野	0	0.0%	
	合計	66	100.0%	

●上記の表に関する項目の配列順序は、「割合%」の割合の大きさに従った

<別表IV-(1)-3 現時点における「卒業後進路」希望(2008年度後期/終了時)>

例	卒業後進路 (2008後期/終了時)	人数	割合%	例/分野・職種
1	就職	13	36.1%	SE、事務総合職、公務員、地方公務員、旅行、出版、製造、重機
2	決めていない	12	33.3%	
3	進学 同一分野	11	30.6%	
4	進学 異分野	0	0.0%	
	合計	36	100.0%	

●上記の表に関する項目の配列順序は、「割合%」の割合の大きさに従った

10月の授業開始時点では、第1位が「就職」、第2位が「進学(同一分野)」、第3位が「未定」であったのに対し、翌年2月の授業終了時では、第1位は「就職」で変わらず、第2位は「未定」が繰り上がり、第3位は「進学(同一分野)」というように入れ替わった。後期の講義開始前と、講義終了後という回答時期が異なったことにより回答者数が変化したなどの事情もあり、一概に比較はできないが、1年前から一転した経済環境変化に対し、就職希望の減少、未定の増加につながった可能性はある。

「異分野への進学」については、上表で紹介した2008年「後期」学生のアンケート結果では希望者は見られなかったが、2008年「前期」受講者の終了時アンケートには、はっきり希望しているものが1名、就職などと併せて複数回答の一つとして異分野への進学を考えるものが1名あった。他の設問に、自由記述回答をする形で入学後、転学部、他大学への再受験を考える学生もいる。学内別組織である学生総合相談センターなども連携をとり、大学としてこうした学生に対するサポートも進めていかなければならない。

(2) 「キャリア形成論」への期待

「キャリア形成論」の受講前と受講後で、学生の期待値がどう変わるのかを調べるために、授業開始時点における「期待」の強さを「そう思う」から、「そう思わない」まで4段階で聞いた。

「授業開始前に期待していたこと」として寄せられた回答を見ると「キャリア・会社・仕事」などのキーワードに関心を寄せた学生が多く、「単位取得」に対する期待は、選択肢上最下位であった。2008年度「後期」/開講時のデータを示す。

<別表IV-(2)-2 「キャリア形成論」の受講前に求めていたこと(2008年度後期/開講時)>

①	受講前期待 (2008年度後期/開講時)	①そう思う		まあ・・・う		余り・・・		思わない		回答なし	合計		
		人 数	割 合%	人 数	割 合%	人 数	割 合%	人 数	割 合%				
1	自らのキャリアについて考えたい	41	88.3%	12	20.0%	2	3.3%	4	6.7%	1	1.7%	60	100.0%
2	会社・仕事内容について知りたい	34	56.7%	22	36.7%	2	3.3%	1	1.7%	1	1.7%	60	100.0%
3	講師のキャリアを知りたい	21	35.0%	30	50.0%	8	13.3%	1	1.7%	0	0.0%	60	100.0%
4	景気下降に伴う就職環境悪化対応	14	23.3%	26	43.3%	18	30.0%	2	3.3%	0	0.0%	60	100.0%
5	講座の評判がいい	10	16.7%	31	51.7%	12	20.0%	6	10.0%	1	1.7%	60	100.0%
6	単位の取得が簡単そう	6	10.0%	24	40.0%	24	40.0%	6	10.0%	0	0.0%	60	100.0%

●上記の表に関する項目の配列順序は、「①そう思う」の割合の大きさに従った

ところが、このあと15回の講義終了時に、「受講前を振り返り」開講時に求めていたものを「改めて思い出してもらった」ところ、実際には単位取得が受講目的の第一順位であったと回答した学生が多かった(2008年度「前期」:82.3%、同「後期」69.4%)。開講時アンケートに、授業期待を「単位取得」とするのは、はばかられたのかもしれない。

その他の「期待」に対する自由記述としては、「理系が会社に入ったときにどうなるのか知っていた」、「今、何をしたらいいのかみたいなのを知っていた」などがあつた。将来に対する漠然とした不安を解消してくれるかもしれない、というスタンスで受講を決めた学生もあつたようだ。

もともと、受講理由を、第1順位「そう思う」と第2順位「まあそう思う」を加えた範囲まで広げると、どの選択肢も80%以上の有意度を示しており、「キャリア形成論」の講義が学生に期待するところも理解してくれたと考えている。

平成20年度「後期」受講者が、受講時に求めていたものもほぼ同様の傾向を示している。

(3) 「キャリア形成論」受講後の印象

受講前はこれといって具体的なイメージをつかめないまま、講義に参加した様子の彼らではあつたが、受講後に示された「本音」ベースの印象はどうであつたか。同じ質問を受講後の時点で聞いた。2008年通年の結果を下表に示す。

<別表 IV-(3)-3. 「キャリア形成論」受講後簿印象について (2008年度/通年)>

① 順	受講後印象 (2008年度/通年)	①十分できた		まあ…		余り…		できなかった		回答なし		合計	
		人 数	割 合%	人 数	割 合%	人 数	割 合%	人 数	割 合%	人 数	割 合%		
1	会社・仕事内容について知る	47	40.9%	64	55.7%	4	3.5%	0	0.0%	0	0.0%	115	100.0%
2	自らのキャリアについて考える	42	36.5%	45	39.1%	25	21.7%	3	2.6%	0	0.0%	115	100.0%
3	講師のキャリアを知る	38	33.0%	67	58.3%	10	8.7%	0	0.0%	0	0.0%	115	100.0%
4	単位の取得	32	27.8%	70	60.9%	8	7.0%	1	0.9%	4	3.5%	115	100.0%

●上記の表に関する項目の配列順序は、「①十分できた」の割合の大きさに従った

受講後に、成果が十分得られたとして学生が評価した中で一番多かったのは、「会社・仕事について知る」であつた。第2位と第3位は「自らのキャリアについて考える」、「講師のキャリアについて知る」が入り、受講前に受講目的の第一として挙げられた「単位取得」が一番少なかった。アンケートの回答をみると、学生たちは、受講の前後で、「単位取得」と「それ以外の目的」の位置づけをはっきり認識し直したのではなかろうか。これは、「仕事とは、キャリアとは」ということについて語ってくれた講師の熱意が学生に伝わり、学生もまた物事の優先順位をきちんと理解して受け止めた結果と見てよいのではないかと思っている。

なお、事前に想定済みの懸念ではあつたが、2008年度「前期」終了時における教養教育院の学生アンケートの一部に、「あまりに企業PRが目立ち過ぎるのはいかがか」、

という意見があつた。講師の現在のキャリアは、所属した組織文化等の影響下にあることも事実であり、一概に排除させることはないと思うが、過度なものは逆効果にもつながりかねないので、考慮頂くようお願いしていく必要がある。

(4) 受講前後における自身の変化

受講前後での自分自身の変化について自由記述を求めた。アンケート提出者83名のうち、65%の54名がコメントを寄せた。代表的なものを示す。

- ・ 第一線で活躍している方はみんな大学時代から死ぬほど勉強していた人ばかりだと思っていたが、実際には自分の時間を大切にしたり、仲間との関わりを大事にしたりしているということを知り、バランスが大事なんだとおもった。(農2女子)
- ・ 働く人ってすごいと思いました。仕事して、キャリアを積んでる人は、仕事に入ってからでも勉強しているということを実感しました。(法2年女子)
- ・ 社会に出てからも今以上に日々勉強しなければならないと知った。企業で働くことの難しさがわかった気がする(工2男子)
- ・ アルバイトや、レポートを書くことは、単なる作業だと思っていたが、将来必要とされる能力を養う上で大きな役割を果たしていることが分かったので、1つ1つしっかりやっていたらよかった。(工2男子)
- ・ 将来の選択肢は思っていたよりかなりたくさんある(理3女子)
- ・ 受講前は、単位のためだけにこの授業を受けたが、実際受けてみて、様々な人の職業や、これまでのキャリアを知って、自分のキャリアについても考えさせられた。将来どんな職業に就くのかという参考にもなった。少なからず将来について触れるよい機会になったと思う。(工2男子)

自由記述欄に示された彼らの意見は多様であるが、一人ひとりにとって必要なメッセージは確実に講師から伝わっている、と実感させられた。

(5) 大学卒業後の進路について考える上でこれまで参考となった意見

2年生を中心とした受講生が参考とした意見は、下表の通りであつた。自分と近い関係者から順次に意見を聞いているようで、概ね順当な結果と思われる。「そう思う」と「まあそう思う」(第1順位と第2順位)合計値で見ると、「友人の意見」、「家族の意見」に次いで、「キャリアに関する大学の授業科目」が挙げられている。大学への期待も大きいものがあることを肝に銘じたい。

<別表IV-(5)-4. 卒業後の進路に関する参考意見 (2008年度「通年」終了期)>

① +	卒業後進路参考意見 (2008年度通期)	①そう思う		②まあ…		①+②		余り…		思わない		回答なし		合計	
		人 数	割 合%	人 数	割 合%	人 数	割 合%	人 数	割 合%	人 数	割 合%	人 数	割 合%		
1	友人の意見	23	20.0%	56	48.7%	79	68.7%	29	25.2%	6	5.2%	1	0.9%	115	100.0%
2	家族の意見	33	28.7%	44	38.3%	77	67.0%	30	26.1%	7	6.1%	1	0.9%	115	100.0%
3	キャリアに関する大学の授業科目	23	20.0%	53	46.1%	76	66.1%	32	27.8%	6	5.2%	1	0.9%	115	100.0%
4	先輩の意見	29	25.2%	46	40.0%	75	65.2%	30	26.1%	9	7.8%	1	0.9%	115	100.0%
5	大学の教員の意見	12	10.4%	54	47.0%	66	57.4%	38	33.0%	10	8.7%	1	0.9%	115	100.0%
6	高校までの教師の意見	18	15.7%	34	29.6%	52	45.2%	47	40.9%	15	13.0%	1	0.9%	115	100.0%
7	書籍(例:週刊誌、ラジオ)	11	9.6%	20	17.4%	31	27.0%	15	13.0%	4	3.5%	65	56.5%	115	100.0%

●上記の表に関する項目の配列順序は、「①そう思う+②まあそう思う」の割合の大きさに従った

(6) 大学卒業後のために準備しているもの(複数回答)。

語学、資格、就職準備など卒業後をはっきり意識した活動をしているものが77.5%、直接就職とは関連なさそうなことに興味を持っているものが7.5%、特に何もしていないと回答したものが15%あった。

卒業後を意識した活動(77.5%)の内訳としては、「TOEICなどの語学関係の勉強」が30.0%、「宅建、行政書士などの資格を求めて専門学校へ行っている」ものが12.5%、「専門科目を深める」と、「社会的実践力をつける」と回答したものがそれぞれ17.5%あった。

このアンケートは、出席者38名の内36名が何らかの対応をしていると回答しており、既に2年生の時期から、将来に対して準備をしていることがわかる。

(7) 自らのキャリアについての悩み

受講時2年生を中心とした学生の悩みはどんなものがあるのか。

「能力不足」「実力不足」「やりたいことが見つからない」「目指す道がわからない」「自分が何に向いているのかわからない」・・・ということばが続く。アンケートに回答した学生たちは、自我の目覚めとともに、以前のように単純に周りのアドバイスを受け入れることができなくなった一方で、自分自身に対する自信のなさからくる不安感の中にあり、身動きの取れない状態にあるように見える。

学生たちの声をいくつかを下記に示す。

- ・ 人としての魅力、話す語学(注:原文のまま)が自分に備わっていると思えないので自分に自信が持てず、就職できるか心配(農2女子)
- ・ 目指す道がわからない、不安(法2男子)
- ・ 周囲の人より志が低い気がする(情報文化2女子)
- ・ 実力が今のままでは足りない(法2女子)
- ・ 卒業後の進みたい進路先が定まらない(工2男子)
- ・ やりたいことが見つからない(農2男子、工2男子)
- ・ 自分が今何をしたいのかわかりません(教育2女子)
- ・ 将来の明確なビジョンを持っていないこと(文2女子)
- ・ 会社で通用するコミュニケーション能力はどう体得すれば良いのか(経済2男子)
- ・ 自らの未熟さ(工2男子)
- ・ 院へ行った場合、その分野が本当に一生の仕事としていけるのか、文系への職業を選択した場合、これまでの学業は無駄になってしまうのではないかと、またその職業でうまくやっていけるのか(工2男子)
- ・ 再受験するか否か、2年の遅れの大きさについて(理2男子)

大きな不安感のまっただ中にいてもがいている彼らではあるが、そのこと自体で、彼らを自立できていないと決めつけなくておきたい。結局これは青年期に誰もが通らねばならない通過儀礼の一種として捉えるのが適当であろう。

親や、教師の勧め・指導に従って今日まで来たものの、

社会に出て一本立ちする時機がようやく視界の果てに見えてくるに及び、疑問点が次々とわき上がってきた。それらのほとんどは、当然「未体験ゾーン」に属するものであり、その結果、自分自身に不安を覚えたというところであろう。極めて正常な反応である。

本講座の講師に対する学生の受講中の態度変化を観察していると、彼らの気持ちのポジションが見える気がする。すなわち、当初、単位取得が主目的であった学生たちは基本的に受け身の姿勢であったため、一般的な「結論」めいた話が続く部分では余り関心を示さず、「内職」をしているものもあった。ところが、いったん講師が自分自身の具体的な体験を通して得た見解を述べる時は、ほぼ全員の視線が講師に集中することに気づいた。彼らが授業に乗ってきた一瞬だった。彼らが欲しているのは単なる「結果」ではなく、「成功」にせよ「失敗」にせよ、結果に導く「プロセス」であり、そのプロセスが自分自身にとって「できそうなものかどうか」ということに非常に関心を示すと言うことが良くわかった。今までは周りが示すアドバイス(実は「確率論的な手堅い結論」)そのものに従って済ませていたものを、これからは周りのアドバイスを参考として、「失敗のないように」自分自身で結論を導びきたいと思っているのが現状なのであろう。今は、失敗を恐れる余り、まだまだ観念的な世界からは抜け出すことができず、具体的なアクションにうまく結びつけられるかどうかは、今後の彼ら次第ではあるが、先輩たちの試行錯誤と現在の姿をよく学び、何事も「選択すること」や「行動すること」から始まり、さらにやり直しのきかないものはないということを体感できれば良いと思う。

(8) 就職活動の情報源

就職活動の情報源について、2008年度の「前期」・「後期」授業、それぞれの終了時に聞いた結果は、企業と直接コンタクトの取れる「会社説明会」で仕入れられる情報を軸にしたいという意見が多かった。2008年度「通年」終了時のアンケート結果を下に示す。

2年生を中心とした学生への質問及び回答のため、就職直前になると変わるかもしれないが、現時点では、パンフレット、WEB情報などについては、相対的に低い評価であった。これはまだ就職等について考える体制になっていないためと理解する方が自然であろう。

＜別表Ⅳ-(8)-4. 就職活動の情報源として役に立ったものを教えてください(2008年度「通年」終了時)＞

① 順	就職活動情報源 (2008年度後期/終了時)	①役に立つ		ちょっと...		余り...		役に立たない		回答なし		合計	
		人 数	割 合%	人 数	割 合%	人 数	割 合%	人 数	割 合%	人 数	割 合%	人 数	割 合%
1	会社説明会	79	68.7%	20	17.4%	5	4.3%	0	0.0%	11	9.6%	115	100.0%
2	インターネット就職サイト	52	46.1%	33	33.0%	12	10.4%	0	0.0%	12	10.4%	115	100.0%
3	企業の就職パンフレット	41	35.7%	48	41.7%	14	12.2%	0	0.0%	11	9.6%	115	100.0%
4	企業のホームページ	38	33.0%	52	45.2%	11	9.6%	0	0.0%	12	10.4%	115	100.0%
5	大学への求人票	34	29.6%	52	45.2%	17	14.8%	0	0.0%	12	10.4%	115	100.0%
6	会社四季報等の書籍	31	27.0%	50	43.5%	22	19.1%	0	0.0%	12	10.4%	115	100.0%
7	民間の就職情報誌など	22	19.1%	54	56.7%	19	13.0%	0	0.0%	13	11.3%	115	100.0%
8	その他(友人や先輩の話)	0	4.3%	1	0.9%	0	0.0%	0	0.0%	109	94.8%	115	100.0%

●上記の表に関するすべての項目の配列順序は、「①役に立つ」の割合の大きさに従った

(9) 会社を選ぶ理由について

受講生に対し、会社を選ぶ時の基準について聞いた。2008年度「通年」／終了後のデータを下に示す。

＜別表 IV-(9)-4 会社を選ぶ理由について教えてください(2008年度「通年」／終了時)＞

①+② 順位	会社を選ぶ理由 (2008年度「通年」／終了時)	①「そう思う」			②「ちょっと思う」			③「そう思う」			④「余り…」			⑤「思わない」			⑥「回答なし」			合計 人数	割合 %	社経生 順位
		人数	割合 %	人数	割合 %	人数	割合 %	人数	割合 %	人数	割合 %	人数	割合 %	人数	割合 %	人数	割合 %					
1	仕事が面白そう	39	77%	22	19%	111	96.5%	4	3.5%	0	0.0%	0	0.0%	115	100.0%	2				2		
2	会社の将来性	51	53%	49	43%	110	95.7%	5	4.3%	0	0.0%	0	0.0%	115	100.0%	4				4		
3	給料が高い	74	64%	35	30%	109	94.8%	6	5.2%	0	0.0%	0	0.0%	115	100.0%	9				9		
4	自分の能力、個性を生かせそう	46	40%	58	50%	104	90.4%	10	8.7%	1	0.9%	0	0.0%	115	100.0%	1				1		
5	地理的条件がいい	52	45%	51	44%	103	89.6%	12	10.4%	0	0.0%	0	0.0%	115	100.0%	6				6		
6	経営者に魅力があれば	41	36%	50	50%	99	86.1%	16	13.9%	0	0.0%	0	0.0%	115	100.0%	5				5		
7	技術が覚えられる	32	28%	60	52%	92	80.0%	21	18.3%	1	0.9%	1	0.9%	115	100.0%	3				3		
8	労働時間が短く、休日	27	23%	58	50%	85	73.9%	20	17.4%	10	8.7%	0	0.0%	115	100.0%	11				11		
9	一流会社	29	25%	50	46%	82	71.3%	31	27.0%	2	1.7%	0	0.0%	115	100.0%	7				7		
10	家から通える	30	26%	50	43%	80	69.6%	32	27.8%	3	2.6%	0	0.0%	115	100.0%	注						
11	寮・グラウンドなど福利厚生施設が充実している	30	26%	48	40%	76	66.1%	34	29.6%	9	7.8%	0	0.0%	115	100.0%	10				10		
12	実力主義の会社	19	17%	33%	57	49.6%	100	87.5%	8	7.0%	0	0.0%	115	100.0%	8				8			
13	先輩が多い	16	14%	41	36%	57	49.6%	21	18.3%	7	6.1%	0	0.0%	115	100.0%	11				11		

注：社経生アンケートの設問のうち、「どこにも行くところがなく、やむなく」は、在学中の名大生への選択肢に含めず、代わりに「家から通える」を加えた。
●上記の表に関するすべての項目の配列順序は、「①「そう思う」の割合の大きさに従った」

ここからは、名大生の意識が、全国レベルでどの程度の類似・乖離性を示すかについて調べるため、(財)社会経済生産性本部ほかによるアンケート調査結果⁽⁷⁾も参考にして考察する。

2008年度通年で学生の傾向を見ると、名大生が選んだ上位5位までのうち、「仕事が面白そう」、「会社の将来性」、「自分の能力、個性を生かせそう」の3つは、社会経済生産性本部ほか(以下、「社経生」と称す)調べのものと同項目が一致した。このうち、「仕事が面白そう」と「自分の能力、個性を生かせそう」に「技術が覚えられるから」を加えたものが、社経生調査によれば上位3位を占めたことから、社経生は、2008年度の4大卒新入社員対し、「まさに“寄らば大樹”的な思考が廃れ、自らの技能や能力が問われる時代へ変化したことを物語っている」と評している。

サンプル数および回答者の階層に差がある⁽⁸⁾ほか、質問方法の違いがある⁽⁹⁾ため、単純に比較することはできないが、社経生調べで第3位にランキングされた「技術が覚えられる」、あるいは第8位にランク付けされた「実力主義」が、名大データにおいては、それぞれ、7位、第12位と後退した位置付けになっている。名大生には技術を覚えよう、あるいは実力を発揮して頑張ろうという自らの主体的な姿勢を示すことより、給与、労働時間などの待遇面への関心が高いということであろうか。

(10) 職場生活についての考え

プライベート重視か、仕事重視か。「デートと残業」の二者択一について聞いた。社経生のアンケート項目から使わせてもらった。組織・会社というものが「人の集まり」を大前提とすることから、個人の勝手ではない全体バランスの中で、最も効率の高い行動を探ることが組織行動論である。その中では、時として公私のけじめを求められることが良くあるが、それへの対応力を見るものである。

社経生データによれば、「『(残業を)断ってデートをする』はバブル期がピークであり『デートをやめて仕事を』はバブル期がボトムである」が、「『デートより仕事』派のこの6年の変化は、平成15年度(2003年度)から平成20年度(2008年度)まで79%→78%→79%→80%→82%→81%、また「仕事よりデート」派は21%→22%→21%→20%→18%→18%」となっており、概ね80:20のバランスを維持している。名大生の回答を見ると、「仕事派」は、2008年度前期終了時→2008年後期開講時→2008年後期終了時で、67.1%→75.0%→75.0%であった。また、「デート派」は、24.1%→13.3%→22.2%という状況である。

「仕事派」も「デート派」も名大生の方が、少しポイントが下がっているが、社経生調査のデータと同様の傾向値と認められる。全体のバランスを常に持ちながら、現実的な対応を心がけるように期待したい。

(11) 仕事についての考えや希望 就労意識について

社経生調査によれば、昨年との比較において大きな差はなかったとのことであった(上位では、昨年と今年で2位と3位が入り替わった程度)。

2008年度「通年」における名大の1位は、社経生調査と大きく異なり「いずれ会社が倒産したり破綻したりするのではないかと不安だ」が入った。下記に示す。

＜別表 IV-(11)-4 就労意識について教えてください(2008年度「通年」終了時)＞

①+② 順位	就労意識(2008年度後期/終了時)	①「そう思う」			②「ちょっと思う」			③「そう思う」			④「余り…」			⑤「思わない」			⑥「回答なし」			合計 人数	割合 %	社経生調査 (平成20年度) 順位
		人数	割合 %	人数	割合 %	人数	割合 %	人数	割合 %	人数	割合 %	人数	割合 %	人数	割合 %	人数	割合 %					
1	いずれか会社が倒産したり破綻したりするのではないかと不安だ	62	53.9%	45	38.1%	107	92.0%	5	4.3%	2	1.7%	1	0.9%	115	100.0%					12		
2	社会や人から感服される仕事をした	36	31.3%	70	60.9%	106	92.2%	6	5.2%	1	0.9%	2	1.7%	115	100.0%					2		
3	仕事を進めて人間関係を広げていきたい	57	49.6%	45	39.1%	102	88.7%	10	8.7%	2	1.7%	1	0.9%	115	100.0%					1		
4	これからの時代は終身雇用ではないので、会社に甘える生活は出来ない	46	40.0%	53	46.1%	99	86.1%	13	11.3%	2	1.7%	1	0.9%	115	100.0%					4		
5	どこでも通用する専門技術を身につけたい	41	35.7%	48	41.7%	89	77.4%	23	20.0%	2	1.7%	1	0.9%	115	100.0%					3		
6	仕事をしなくても人間関係に不安を感じる	26	22.6%	61	53.0%	87	75.7%	23	20.0%	4	3.5%	1	0.9%	115	100.0%					7		
7	いずれか倒産するのではないかと不安だ	21	18.3%	65	56.5%	86	74.8%	24	20.9%	2	1.7%	3	2.6%	115	100.0%					9		
8	強い意欲に飲まれて、少々の苦労はしても頑張る	18	15.7%	65	56.5%	83	72.2%	28	24.2%	3	2.6%	3	2.6%	115	100.0%					5		
9	仕事を生き甲斐にしたい	33	28.7%	46	40.0%	79	68.7%	28	24.2%	5	4.3%	2	1.7%	115	100.0%					6		
10	面白い仕事であれば、収入が少なくても構わない	21	18.3%	47	40.9%	68	59.1%	34	29.6%	12	10.4%	1	0.9%	115	100.0%					8		
11	面白い仕事であれば、勤務地について構わない	24	20.9%	41	35.7%	65	56.5%	40	34.8%	7	6.1%	3	2.6%	115	100.0%					名大独自設定		
12	職場の上司、同僚が強硬でも自分の仕事が終わったら帰る	10	8.7%	45	39.1%	55	47.8%	49	42.6%	9	7.8%	2	1.7%	115	100.0%					10		
13	仕事を休むための手段であって、面白いものではない	7	6.1%	31	27.0%	38	33.0%	59	51.3%	17	14.8%	1	0.9%	115	100.0%					11		
14	職場の同僚、上司、部下などは勤務時間以外にはつきあいたくない	4	3.5%	28	24.3%	32	27.8%	62	53.9%	20	17.4%	1	0.9%	115	100.0%					13		

●上記の表に関するすべての項目の配列順序は、「①「そう思う」+②「ちょっと思う」の割合の大きさに従った」

名大データは、昨年以前のデータの蓄積がないため、社経生データと、時系列での比較が困難であるが、2008年に入ってから急激な経済環境の変化があったことが学生の心理に影響を与えた可能性がある。

上位5位までの範囲で比較すると、名大データも、社経生データも残りの4つが項目としては一致している。社経生データの5位は「高い役職に就くために、少々の苦勞はしても頑張る」であった。この項目に関する本年度の名大生のプライオリティは社経生調査より低い8位であった。

(12) 重視する生活価値観

「重視する生活価値観」について、2008年度「通年」

終了時のデータを下記に示す。社経生データは、概ね「積極性」を示す項目が上位を占めたという評価であった。名大生についての調査結果も、全16項目の選択肢のうち、2008年度の前期・後期とも「そう思う」と「ちょっとそう思う」の合計値の上位10位までは、社経生調査と同一傾向を示した。ただ、上位10位の内容について、社経生は、「積極性を示す」と評するが、堅実、地道な生き方が、半々という印象の方が強い。

本学の学生は、東海地域の出身者多く⁽¹⁰⁾、どちらかといえば、豊かで堅実な土地柄で育ち、まじめにやっていたら失敗は少ないという環境の中で育っている。生活価値観調査におけるデータもこれを裏付けているように見える。積極性に欠けるとの評価をされる一因かもしれないが、大人たちはともかく、「若ものはもっと自由で良い」⁽¹¹⁾。

グローバル化の波に翻弄されざるを得ない現代においては、できるだけ広い視野で物事を捉えた上で、自らの指針を定めて行動して行くことが必要である。進むにせよとどまるにせよ、あるいは後退するにせよ、受け身でない対応を期待したい。

別表 IV-(12)-4. 「重視する生活価値観」(2008年度「通年」終了時)

①+② %順	重視する生活価値観 (2008年度「通年」終了時)	①「そう思う」		②「ちょっとそう思う」		③「どちらともいえない」		④「余り思わない」		⑤「回答なし」		合計	社経生 順位	社経生 割合%			
		人数	割合%	人数	割合%	人数	割合%	人数	割合%	人数	割合%						
1	人間関係では、先輩と後輩などの上下のけじめをつけることは大切なことだ	48	41.7%	46	40.0%	94	81.7%	19	16.5%	1	0.9%	115	100%	1	30.6%		
2	少し無理だと思われるくらい目標を立てた方が実現する	37	32.2%	54	47.0%	91	79.1%	20	17.4%	3	2.6%	115	100%	6	74.9%		
3	自分はいい時代に生きたと思う	34	29.6%	48	41.7%	82	71.3%	28	24.3%	4	3.5%	115	100%	5	81.5%		
4	冒險をして大きな失敗をするよりも、堅実に生き方を学ぶほうがいい	32	27.8%	60	52.2%	92	80.0%	16	13.9%	6	5.2%	115	100%	9	98.5%		
5	明るい気持ちで積極的に行動すれば、たいしていいことは達成できる	30	26.1%	58	50.4%	88	76.5%	22	19.1%	4	3.5%	115	100%	3	84.6%		
6	将来の幸福のためには、今は我慢が必要だ	29	25.2%	60	52.2%	89	77.4%	21	18.3%	4	3.5%	115	100%	2	85.0%		
7	他人にどう思われるよりも、自分らしく生きたい	25	21.7%	60	52.2%	85	73.9%	26	22.6%	3	2.6%	115	100%	4	83.2%		
8	余り収入がよくなくても、やり甲斐のある仕事が好きだ	21	18.3%	62	53.9%	83	72.2%	26	22.6%	3	2.6%	115	100%	7	86.3%		
9	企業は経済的な利益よりも、環境保護を優先すべきだ	17	14.8%	71	61.7%	88	76.5%	26	22.6%	0	0.0%	115	100%	7	86.5%		
10	たとえ経済的に恵まれなくても、気楽に楽しく暮らすほうがいい	16	13.9%	51	44.3%	67	58.3%	30	26.1%	8	7.0%	115	100%	10	98.3%		
11	自分と意見のあわない人とは、余りつきあいたくない	15	13.0%	59	51.3%	74	64.3%	33	28.7%	7	6.1%	115	100%	12	48.1%		
12	世の中は、いろいろな面で、今よりもよくなっていくだろう	11	9.6%	43	37.4%	54	47.0%	51	44.3%	8	7.0%	115	100%	16	47.5%		
13	リーダーになって苦労するよりは、人に従っている方が気楽でいい	8	7.0%	49	42.6%	57	49.6%	45	39.1%	11	9.6%	115	100%	14	47.5%		
14	周囲の人と違えば、あまり構わない	8	4.3%	50	43.5%	56	47.8%	47	40.9%	12	10.4%	115	100%	16	36.2%		
15	世の中、なにほどもあれ、自立したほうが得だ	4	3.5%	32	27.8%	38	33.1%	62	53.9%	16	13.9%	115	100%	11	50.6%		
16	世の中は、いろいろな面で、今よりも昔の方がよくなった	2	1.7%	28	24.3%	30	26.1%	69	60.0%	14	12.2%	2	1.7%	115	100%	12	48.1%

●上記の表に関するすべての項目の配列順序は、「①「そう思う」+②「ちょっとそう思う」の割合の大きさに従った

(13) これからの仕事、生活について

(ア) これからの社会生活を送る上で「仕事を中心とするか、(私)生活を中心とするか」について聞いた。

別表IV-(13)-1. これからの社会生活を仕事中心にするか、(私)生活中心にするか

%順	項目	働き方の程度(2008年度「通年」(開講時))		社経生(2008年度)	
		人数	割合%	人数	割合%
1	「(私)生活中心」	81	58.3%	—	11.2%
2	「仕事中心」	48	34.5%	—	9.2%
4	回答なし	8	5.8%	—	0.1%
3	どちらともいえない(両立)	2	1.4%	—	79.5%
	合計	139	100.0%	2,251	100.0%

●上記の表に関するすべての項目の配列順序は、「割合%」の大きさに従った

「どちらともいえない(両立)」という選択肢の扱いについて、名大生と社経生回答者では受け止め方に差があったのか、この部分の差が異常なほど大きい。強い

て説明を付けるとすると、まだまだ先のことでイメージがわからず感覚的に割り切った学部2年生中心の名大生と、社会人としてスタートを切り、現実的な選択を迫られた社経生回答者との意識の差というところらえ方もできるかどうかであろう。

「仕事中心」「(私)生活中心」の2つだけをベースにして比較すると、名大生においては「私生活中心」が60.8%、「仕事中心」が39.2%となったのに対し、社経生では「私」が54.9%、「仕事」が45.1%となった。基本的には私生活を優先したいというのが共通的なスタンスと出たが、社経生が「仕事中心」方向に約5%シフトしているのは、現実的な判断をした大人の判断であろうか。

(イ) 続いて、「人並み以上に働きたいかどうか」を聞いた。

別表IV-(13)-2. 人並み以上に働きたいかどうか

%順	項目	働き方の程度(2008年度「通年」(開講時))		社経生(2008年度)	
		人数	割合%	人数	割合%
1	「人並み以上」	62	44.6%	—	37.8%
2	「人並みで十分」	61	43.9%	—	52.7%
3	どちらともいえない	11	7.9%	—	9.4%
4	回答なし	5	3.6%	—	0.0%
	合計	139	100.0%	2,251	100.0%

●上記の表に関するすべての項目の配列順序は、「割合%」の大きさに従った

名大生のデータについては、前年度以前の蓄積がないため時系列ベースでの検討は困難であるが、「人並み以上」と「人並みで十分」が、ほぼ同数で並んだ。社経生データによると、「昨年度と今年度を比較すると、『人並みで十分』は、48%から52%に増加し、『人並み以上に働きたい』は、43%から39%に減少している」⁽¹²⁾。

社経生調査と名大調査、それぞれの結果にずいぶん違いがあるが、それぞれの母集団特有の事情があるというよりは、景況感の大幅悪化が顕在化してきた2008年春の前後に分かれて調査が行われた⁽¹³⁾影響はなかったか。特に社経生調査には、「これは就職氷河期を本格的に脱して、超売り手市場だったことが影響しているものと思われる」⁽¹⁴⁾と、調査集計対象者が景況感悪化をほとんど意識していない状況で回答したと認識している様子があることから推測される。名大生の集団としての特異性があるとすれば、もう少しデータの蓄積を重ねた後の判断としたい。

4. まとめ

「キャリア形成論」の成果を定量的に示すことは、極めて難しい。講義時点と、それを聴講した学生が「キャリア形成」を達成できたかどうかを確認する時点との時間的乖離もさることながら、講義をする講師の個性・価値観と、受講する学生のそれらとの相違があること、また、人間は成長するという事を考えると「キャリア形成」の結果に、「講

義」がどの程度の因果関係を持ったかということをはかることは容易ではない。

先輩講師には、後輩に対し伝えたいものが確かにあった。しかしながら、それらが受けとめるすべての学生一人ひとりにとって「マーケット・イン」のかたちで示されたかどうかというそれはあり得ないことであり、「プロダクト・アウト」にならざるを得ない面がある。しかし、講師から見て「マーケット」である学生自身も、実は単なる受け身の存在ではなく、意思と力を持ち、自らの将来に対してチャレンジできる存在であることを忘れてはならない。一人ひとりが、外部情報を自らの手で、自分自身の人生というマーケットに合わせられるような視点持ち、その上で自分に適用すれば、先輩講師が伝えなかった内容は、一人ひとりにとって大いに意味のあるものになりうるはずである。

一人ひとりが人生を送る中で出会う様々な事象に対し、常にオープンな気持ちで接し、一步高い見地から、前向きに対処することこそが、自らの人生・キャリアを形成していくことになるのではなかろうか。その意味で本講座は、学生を揺さぶるという点において有効であった。筆者自身はそんな総括をしている。

2年間の短い期間ではあったが、「キャリア形成論」の担当ができて、若い人たちと先輩 OB・OG のキャリアを一緒にたどることができたことは、望外の喜びであった。推薦図書も多くは、筆者にも初対面のものも多く改めて先輩方に新しい世界を見せて頂いたことをありがたく思っている。

社会人として大学におけるスポットの講義、講演は経験があったものの、連続講義は初めてであったため、当初は過度に学生諸君の自主性を「信頼・尊重」し過ぎ、授業中におしゃべりを続ける一部の受講生に注意しきらず、まじめに聞きたい受講生からコンプレを受けたことについては申し訳なく思っている（本年度は、ずいぶん自分では改善したと考えているが）。何人かの諸君とは、個別の話もできたことは楽しい思い出であった。

「キャリア形成」は、計画通りに進められることは極めてまれであるが、心がけるかそうしないかの差には、先輩方の講義を思い起こすまでもなく大きなものがあると思う。

最後になるが、学生が授業終了にあたり、教養教育院のアンケートに自由記載として残したコメントを紹介して本稿を終わりたい。

「こういう授業は、自分の成長にとり、非常に良い機会となる。いつか自分もこの教壇に立って話ができるようになりたい。」

(注)

- (1) 開講者（前任者）は田中宣秀（現／日本インターンシップ学会副会長、元／名古屋大学教授）氏。
- (2) 新しい講義責任者は、名古屋大学 社会貢献人材育成本部ビジネス人材育成センター長・武田穰 教授。
- (3) 本稿、2 - (2)「講師の出身学部」参照。
- (4) 就職しても早期に会社を辞めるという現象。就職後3年以内に、中卒者の7割、高卒者の5割、大卒者の3割が仕事を退職していることを意味する。実際の統計でも厚生労働省の調べによると、2002年春の新卒就職者のうち、中卒で70.3%、高卒で49.3%、大卒で35.8%が2005年度末にすでに退職しているという結果が出ている。
- (5) 後出、4 - (7)「自分のキャリアについての悩み」参照。
- (6) アンケートは、2008年度前期終了時に1回、2008年度後期の授業開始前と授業終了時に各1回実施した。このほか、教養教育院が学生に対し、2008年度の「前期」および「後期」授業終了時点に実施したアンケート結果も参考にした。
- (7) (財)社会経済生産性本部ほか 平成20年度新入社員「働くことの意義」2008年6月（このうち、4年大卒新入社員のデータを比較対象とした）。
- (8) 名大 n=115、社経生 n=2251、名大回答者：2年生中心、社経生回答者：4年制大卒の2008年新入社員。
- (9) 社経生は全項目から一つを選択回答、名大は全項目に対し程度の差を回答。
- (10) 東海（愛知・岐阜・三重・静岡）から76.2%。北陸（富山・石川・福井）を加えると82.9%、長野まで加えると91.5%がこの地域からの出身者となる。「名古屋大学プロフィール2008 資料編」、名古屋大学広報室、2008年6月。
- (11) 團藤重光・伊藤 乾編「反骨のコツ」朝日新書、2007年、p.199。本書は、講師から推薦された課題図書の中の1冊である。
- (12) 社会経済生産性本部ほか「働くことの意義」調査報告書、2008年6月、p.23。但し、ここで示される数値は、「大学4年卒新入社員2,251名」の数値ではなく、「これを含むすべての調査報告対象者3,833名を対象としたものである」。
- (13) 「社経生調査期日2008年3月5日（水）～4月30日（水）」社会経済生産性本部ほか「働くことの意義」調査報告書2008年6月、p.3。名大における調査は、「前期」については2008年7月、「後期」については、同10月、2009年2月であった。
- (14) 社会経済生産性本部ほか「働くことの意義」調査報告書、2008年6月、p.23。